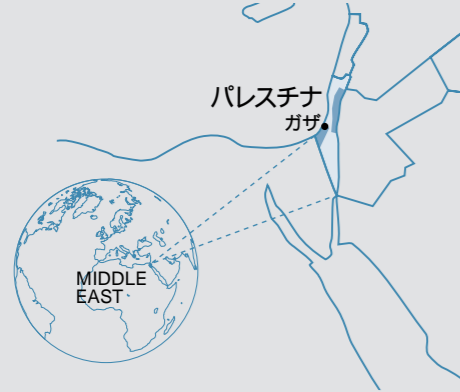


from Palestine



JALAPのメンバー。清掃活動終了後の海岸にて

たノウハウがあり、また彼ら自身の中に母国の役に立ちたいという潜在的な希望があったからだ。

しかし、帰国研修員たちにやる気があっても、彼らが集まる場所も最低限の事務機器も運営予算もない状況で、「じゃあ、やってみよう」ではさすがに物事は始まらない。初期投資に当たる年間約200万円の同窓会助成金を認可してもらったために、日本に繰り返し説明し、申請資料の

活に困窮しているパレスチナ人を支援したくても手が出せないというジレンマの中で、何か協力できる手段はないだろうかと思いついたのが、帰国研修員を同窓会として組織化し、会に物的、資金的協力をすることによって、彼らに支援事業の担い手になることだった。このアイデアは見事に当たった。彼らには日本の研修で得たノウハウがあり、また彼ら自身の中に母国の役に立ちたいという潜在的な希望があったからだ。

も母親たちには大変喜ばれた。帰国研修員らは、JICAと染め抜かれたTシャツを着て、誇らしげに、楽しそうに住民と接している。それまでJICAのことを知らなかった人々も、このイベントを通じて日本の援助への感謝とJICAを覚えてくれたに違いない。

05年9月29日には、イスラエル入植者が撤退した跡地の海岸線で、ボランティア清掃活動を地元のハン・ユニス市と協力して行った。イスラエル入植者がガザから撤退した後、今まで近寄れなかった入植地近辺の海岸にも自由に行けるようになった。

ともあれ、難産の未生まれた「パレスチナJICA帰国研修員同窓会」は、今やガザ地区内では地元社会に根差したNGOに育った。ガザを訪れたJICA関係者のカメラが盗まれた際も、同窓会を通じてコミュニティーに通報したことで、3時間後には発見された。盗まれた事実には残念だが、「日本人のものを取ってはいけない」というコミュニティーの意思が働いた結果だったのだらう。帰国研修員たちが地元のコミュニティーに入り込んでいくからこそ、JICAや日本の認知度も高まり、ひいては日

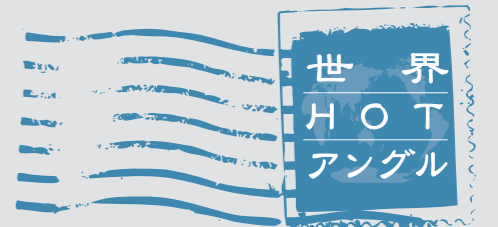


砂浜の清掃活動に当たる帰国研修員とその家族。清掃活動の様子は地元テレビで放映された

Hot Angle Country | Palestine

文=成瀬 猛 (JICAパレスチナ事務所長)
写真提供: JICAパレスチナ事務所

地元社会に貢献する ガザの帰国研修員



JICAの研修事業に参加し、さまざまな技術やノウハウを習得した帰国研修員の活動が各地で活発化している。治安が不安定で日本人による活動がままならないガザ地区では、パレスチナの帰国研修員同窓会が中心となって、ガザの町や人々の生活に役立つ取り組みを行っている。



ガザで広がる 帰国研修員の活動



帰国研修員と筆者(左から2人目)。彼らは鳥インフルエンザの拡大防止活動なども行っている

2005年11月27日、日本で医療関係の研修を受けたJICA帰国研修員が中心となり、日ごろ適切な医療サービスを受けられないパレスチナ難民居住区の一つ、ガザ地区のビーチ難民キャンプで、メデイカル・サービスタクティクスと銘打った、各科の医師による無料健康相談と薬の処方が行われた。また、イスラム社会では非常に重要な儀式でもある割礼手術も実施された。生後間もない男の赤ちゃんが割礼される様子は痛々しいが、無料で清潔に行ってもらえるチャンスだけに、経済的にも衛生的に

小さな面積だが、そこに150万人もの人々が住んでいる。ほとんど娯楽がないガザで、海岸と海は住民にとって最大の憩いの場所ともいえる。「自分たちの手に戻った貴重な海岸と海をきれいにしておきたい」というハン・ユニス市の呼び掛けに、「パレスチナJICA帰国研修員同窓会(JALAP)」のメンバーが家族や友人を連れて参加したのだ。彼らが率先して海岸清掃に当たる姿は

作成に尽力した。だが、同窓会の取り組みが新しいこと、また、そのために200万円ほどの予算が必要だというのは、これまで前例のない内容であったことからなかなか承認がおりず苦労した。



無料健康相談で訪れたパレスチナ難民の血圧を測る帰国研修員(右)

本人の安全を守ることに役立っているといえる。

難産だった 同窓会の誕生

私がパレスチナに赴任した01年は、パレスチナとイスラエルの民族紛争が最も激しい様相を呈していた。テロと報復の悪循環が繰り返され、とても日本人を派遣して技術協力ができる状況ではなかった。占領下で生